

新蜀道书画报

11
2023

书画精品(书画)



鳥

兜

能村 研三

あだ名は「ゲタ」さん

「沖」の初代編集長を務め最高顧問であった林翔先生の命日は十一月九日である。十四年前に亡くなったので「沖」誌友の中にはよく知らない方もおられるだろう。

翔と登四郎との交流は、昭和六年國學院大学で同窓として机を並べ、共に短歌誌「装填」で短歌を学んだのに始まる。登四郎二十一歳、翔十八歳であった、登四郎が大学に入って胸を患い休学していたため、三年のブランクがあったようだ。

交友七十年遂に君逝く青葉雨 翔

登四郎が亡くなる平成十三年まで、実に七十年に及ぶ親交があった。短歌誌への参加に始まって、その後俳句を志し「馬酔木」へ投句、そして昭和十三年に市川学園への赴任など常に一緒に道を歩んできた。

「沖」が創刊された時、登四郎の師である水原秋櫻子先生が、一誌を持つことを登四郎に許した際、「編集は林翔さんをお願いするといよいよ」という提言を下された。現在の「沖」の編集の基本スタイルは翔先生が築きあげたもので、五十余年踏襲されている。この編集レイアウトはその後いくつかの結社誌も真似て作られたようだ。初期の

遠くより分かる榛の木 処暑の風
目耳なほ見ゆる聞こゆる 今日白露

鳥兜とつさの一語つまりけり

吾亦紅足して花束淋しうす

稲の穂のはづみごころを持たせをり

鮎錆びて瀬音緊りぬ一つ星

蛇穴に入る山脈の紺深し

闇を切るごとし白桃に刃を渡し

望遠鏡秋思の人を捕へたる

地にひとり脚立にひとり松手入

編集には私もお手似伝に参加し、翔先生宅に夜遅くまでお邪魔したことがある。

中誰が起す初句会

翔

編集のメンバーで新年に翔先生宅にお邪魔した時の句で、「中」という一字詠み込みの席題で翔先生が作られた句である。

晩年は「馬酔木」顧問としても、若手の育成に尽力されたが、「沖」では、月に三つの例会と同人句会で、登四郎と共に我々会員の指導をして下さった。

私は中学高校と市川学園に進学したが、登四郎が教頭であったため理科系コースに進む高校三年を除いて五年間は現代国語、古典、漢文などの国語系の事業は全て翔先生が担当された。初めて俳句を作ったのも翔先生の授業で、

青みかん八百屋の前を聖火ゆく
という句を作って市の中学生俳句大会で一位をとった思い出もある。

翔先生はお顔がやや四角なので、生徒からは「ゲタさん」のあだ名で親しまれた。

登四郎と翔先生の篤い七十年の親交が「沖」の礎を築いてくれたのは間違いない。

能村 研三

銀漢の尾

森岡 正作

栗飯の

釣れてよし釣れずともよし鯨日和
嫁にやる日の啄木鳥のよう叩く

朝採りの腰まで露に濡れてをり

銀漢の尾に触れて酔ふ杣の宿

猛禽の一撃食らふ穴惑

文士碑の土台の隙間つづれさせ

竜淵に潜みてをらむ昼の酒

我が家の栗も収穫時となった。今年は猛暑が影響したのか穂がやや小ぶりに思えるが、跳び出る栗のこつとした重さは何とも言い難い手応えである。昔は専ら裏山に出かけ、山栗いわゆる柴栗を拾ったものであったが、今は見た目の良い栗ばかりなので、柴栗は里に出て来ないように食糧難の熊にあげた方がよいのであろう。

登四郎先生の御句に「栗飯のふつくら炊けて祝ぎころ」がある。我が家でも収穫の最初は栗おこわと決めていているように、何の慶事がなくても「祝ぎころ」の気分になる。何時だったか、栗おこわから小豆を取り除き、茶碗に栗を多めに盛り上げて鞆を買ったことがあった。栗の渋皮を剥く作業の大変さを知れば、作ってくれた人が怒るのは当然である。ともかく炊き立ての新米のつやつやした中で輝く栗の黄金色は眩しく目出度い。

濤声集

朝の鉄棒

千田百里

をぢさんたちの朝の鉄棒小鳥来る
麝香草秘境と言へば人群れて
工事場にビルの未来凶雁渡る
赤い羽根大臣たちの胸を刺し
母の忌を修し膝抱く十三夜
*秋ひと日無為にて落丁のごとし

ひとすぢの

辻美奈子

*ひとすぢの溝白桃を閉ぢあはす
朝顔やすとんと着たるワンピース
電磁波の微かに吾亦紅震ふ
月の出や獣となりて夜を嗅ぎ
何の罪ならむ残暑の限りなし
耳栓のやうなイヤフォン木の実降る

蒼茫集

虚空

湯橋喜美

*牛乳に膜張る力厄日過ぐ
濡れ縁を薄ら陽歩む雁渡し
一葉に足る空蟬の爪ぢから
かなかなの連られ鳴きする夕心
戸縮りの音の乾けり稲びかり
虚空いま均すものなし月渡る

いのちの明日

峰崎成規

*蜻蛉の尾いのちの明日を水に打つ
晩学を悔い焦らず秋の蟬
銀河の端コンビナートの灯に熔くる
星飛ぶや言うて忘るる軽き嘘
新酒酌む互ひの齡口にせず
原罪をたらふく呑みし秋の蛇

ゴーヤチャンプル

広渡敬雄

ずつしりと背疲れけりハンモック
初秋の暮れ際の沢詩のごとし
露浴びし膝濡るるまま樹木葬
秋彼岸すうつと土に沁みる水
烏瓜引かるるが好き引いてやる
*ゴーヤチャンプルなるやうにしかならぬ

ホームドア

細川洋子

朝顔に暁闇の色畳みあり
布目くつきり新涼の木綿豆腐
ひとつづつ空の縁取るこ雲
足首へ感電かすか鉦叩
三角の鉄砲狭間や秋の風
*ドア開きホームドア開き秋暑し

飛鷹選評



能村 研三

磨ぎ汁を余さず畑へ今年米

岩波 博庸

その年に収穫した米は十月ころに出回る。手塩にかけて育てた米が、今年も収穫を迎えた。そうした喜びの思いがあり、この新米の磨ぎ汁は畑に施すことにした。化学肥料を使わず、お米の磨ぎ汁で植物を育てることで、より安全な作物を育てることが可能になると言われている。水資源の節約にも繋がるかもしれない。何より、新米への有難い気持ちが感じられた。

柘榴はぜ一粒ごとにある主張

竹田 絹子

秋空に実ったいろいろな果実は美しい空に冴え冴えと輝く。ことに柘榴は厚く硬い果皮が裂けると、ぎっしりと詰まった鮮紅色の多数の実が見え、赤々と光を宿す。濃紅のみずみずしい小さな実が宝石のように詰まっていて、一粒ごとにそれぞれ主張し合っているようである。

本心の透けて海月の浮き沈み

工藤 邦子

広い海原に、海月が漂っている。果てしない海の広さに比べれば、海月の命はごく小さなものだが、寄る辺ない海の中でたしかに生きている一つの命である。海中の暗闇の中でも一段と引き立つのは海月の透明感。海月は脳や心臓といったものが無く何も考えずに本心そのまま浮き沈みを繰り返している。

細密画 近づくとほどに涼しき目

吉村さよ子

細密画とは東洋美術で、対象を緻密にこまごまと描写した絵画のこと。たとえば奈良時代の彩絵、ペルシャやインドの宮廷絵画などを言う。緻密な描かれていて、絵に近づいて観ると改めてそのすばらしさがわかり、目に一抹の涼しさを感じた。

ボクサーステップの人すれちがふ今朝の秋

久間 早苗

今年の夏は猛暑で、九月になっても暑い日が続いた。下五の「今朝の秋」という季語の使い方も、今までに経験したことのない暑さ故、やっと朝の涼しさを実感した感じが出ている。朝の散歩道でボクサーステップをしている人が軽やかにすれ違った。

梯梧咲く琉歌の色を宿しつつ

坂井 博

春が過ぎ、初夏の季節に蕾を開く梯梧は真紅の色を帯びた花を咲かせ、「琉歌」の中でも歌われている。沖縄独特の季節の到来を知らせてくれる花で、琉歌で歌われている節を思い浮かべながら梯梧の花を見入った。

高枝に秋が来てをり空 鉢

頓所 敏雄

庭木の中でも松は手入れが難しく、本職の植木屋に頼むことが多い。植木屋さんの鳴らす鉢の音が空に響いている。暑い夏が長かったが、高枝にかすかに秋の気配が感じられるようになったのが、空鉢の音からも感じられた。

潮鳴集

唐辛子 菅原健一

残心のごとし机上の秋扇
大河にもたゆたふ流れ一遍忌
* 少年でゐたき一日や唐辛子
喉に小骨刺さりしままに震災忌
明滅の滅に殉ずる秋螢

象使ひ 兵藤 惠

月光やテントに眠る象使ひ
日の欲しき色に揺れる赤のまま
* 踊り子の手より阿呆になつてゆき
風呂熱うせよ蝸の鳴けばなほ
日の入りて切り岸熱き風の盆

黙 禱 七田文子

夏座敷正座苦手な者ばかり
* 蜘蛛の囿は楽器奏づるは夜風
八月逝く黙禱いく度重ねしか
窓磨く新涼の風見ゆるまで
稲の花信濃の星の大きこと

貝の匙 栗坪和子

売られゆく牛を梳きをり稲の花
土間を射る西日の中に船簞筥
そと海の昂りいつもご赦免花
草の市幽霊飴は竹籠に
* 水澄みてそこはかとなき貝の匙

家 紋 澤田英紀

先代の姿の見えぬ草の市
せせらぎを宿す蜻蛉の翅の透き
故郷は夕日の向う赤とんぼ
* 天界の家紋は白き曼珠沙華
秋風を呼ぶ木道の音乾き

ポプラ 多田ユリ子

盆過ぎの座りて軋む父の椅子
* 逝く夏のポプラ祈りのごとく佇ち
身中のどこか風立つ青蜜柑
とんぼうに貸したる肩の凝りかとも
新松子真白きボール投げ返す

麒麟の一步 嶋本博司

手習ひの貼紙ひそと濃紫陽花
噴水や心浮く日はより高く
* 秋高し麒麟の一步は二米
手になじむ新書の厚み秋灯下
嘘の詩はすぐにばれます唐辛子

一町歩 柴田ふさこ

球児等の均すトンボや晩夏光
* 稲刈つて無防備になる一町歩
赤松の気炎の窯変初嵐
とんぼ絵の安南茶碗しだれ萩
走り蕎麦亭主自筆の走り文字

黒人霊歌 村上葉子

混迷の世にこそ着たき白地かな
ぬつと現はる八月の大風車
永眠は昼寝のつづきかもしれぬ
* 訃のつづく白さるすべりさるすべり
黒人霊歌炎天のアスファルト

オール電化 稗田寿明

新涼や始業チャイムの五分前
草市の使ひ古りたる値札かな
* 震災忌オール電化といふ不安
露草の蒼や貫き通す意志
星流れ幾光年の旅なかば

沖作品



能村研三選

夕暮れて狭庭にもある虫時雨

東京

岩波 博庸

梵鐘の音色溶けゆく大花野

*磨ぎ汁を余さず畑へ今年米

山里は水の豊かに星月夜

ビー玉や心弾ける鯨日和

*柘榴はぜ一粒ごとにある主張

呵呵と割れムシクの叫びに似て柘榴

ひそやかな水引草の朱のかげり

みんみんの算数できぬ子を囁す

新宿はマンモスの骨大夕焼

反骨を通すつもり羽抜鶏

柿右衛門の一輪挿しや柿の花

*本心の透けて海月の浮き沈み

城下町の古民家宿や青簾

桐の花橋を渡れば我が生家

青森

工藤邦子

竹田 絹子

強靱な形を選りて茄子の牛

千葉

吉村さよ子

草刈りて運河の流れあらたなり

十字掛けの雑誌積み上ぐ店日除

*細密画近づくほどに涼しき日

頬杖の羅漢にんまり秋の雲

ひもじさと空の青さや終戦日

埼玉

久間 早苗

*ボクサーステップの人すれちがふ今朝の秋

喘ぎつつやつと五合目秋澄めり

赤れんが倉庫賑はふ美術展

をみなへし風の小諸の丸手門

*梯梧咲く琉歌の色を宿しつつ

雷神の避けて千年五重塔

語り部は第四世代に原爆忌

熱砂舞ふ採石場のシヨベルカー

パナマ帽電気ブランに父の貌

千葉あ

坂井 博